

□8月20日 主日礼拝説教短縮版(隅野徹牧師)「御言葉を実践する」ヤコブ1:19～27

ここでは「御言葉をただ聞くだけで、実行しない者」が「鏡に映る自分を眺める人に似ている」ということが教えられています。とくにここでは「立ち去る」という言葉が大切だと多くの注解者がいっています。昔の鏡は、いまのような大きなものはなく、クリアでもなかったため、その用途は「自分の身だしなみをチェックし、直す」ためのものだったようです。現代の私たちは鏡に映る自分をちらっと見ただけで立ち去る、ことは多くありますが、昔の人にとって「鏡に映った自分をみて、何もせずにいること」は、それこそ「鏡の無駄遣い」のような感じで思われていたようです。

この箇所では聖書が私たちに伝えようとしていること、それは「聖書の御言葉が、私たちにとっての心の鏡である」こと、そして「御言葉を読みながらも、自分の心の中を正さないなら、それは、本当にもったいない」ということです。当時の多くの律法学者にとって、「聖書・旧約律法という鏡」は「自分を正すもの」ではなく「自分に見とれる、うぬぼれの道具」になってしまっていたのです。

私たちは時々「自分の心の中はこれで良いのか？」とチェックする必要があります。善い行いの量によって報われ、救われる」のではありません。しかし、神の恵みにより無償で愛され、生かされている。その喜び、その感謝が、私たちの人生に生かされているか？そのことをチェックする必要があります。

聖書を日常的に読んでいながら、自分の心の中を問う機会やきっかけを、神が与えてくださることは間違いありません。そしていままでも以上に積極的に出て行って、「隣人を愛する」生き方へと、神の御言葉は導いてくださいます。その行いは「私たちの人生を、本当の意味で豊かにし、幸せにする」と信じています。(終)